

あとがき

一九九一年に修士論文を基にした『南方熊楠 一切智の夢』を上梓してから本書の刊行にいたるまで、南方熊楠研究に専念してきた二十五年間、つまり四半世紀に及ぶ時間は、筆者にとつてたいへん幸福なものであった。何より、田辺市の旧邸を中心としてふんだんに残された資料を読み込む作業は、常に充実感をとまなつていた。研究仲間や理解者に恵まれて、さまざまなかたちで議論や発表の機会を重ねたり、熊楠が踏破したアメリカ各地、ロンドン、那智などに赴いて、その足跡を確かめたりすることは、理屈抜きに楽しかった。

とは言え、この間、筆者の南方熊楠の学問に対する評価にまったく「ぶれ」がなかったと言え、それは嘘になるだろう。『一切智の夢』を書き上げてからしばらくの間、熊楠の知的探究の重要性を何とかして伝えなければと思いやや大風呂敷を広げて論じ直すうちに、はたして現在の学問状況の中でそのことが本当に意味を持つのだろうか、真剣に疑問に感じ始めたことは事実である。その疑問は、二十代の後半から三十代にかけて、自分の中でひそかに大きくなつていった。

特に、一九九四年から二年間、ケンブリッジ大学の社会人類学科客員研究員として英国に滞在する間に感じた、海外の研究者との認識の懸隔は絶望的なものと感じられた。この伝統ある社会人類学の研究室は、名だたる教授陣や博

士号をめざす多くの大学院生が集まる学問的な活気のみなざる場所で、そのこと自体には非常に刺激を受けた。しかし、自分の研究対象である南方熊楠の話をして、その重要性はなかなか理解してもらうことがなかった。

ジェイムズ・フレイザーの世代の英国の人類学に影響を受けた学者という説明をしてみるのだが、そもそもフレイザーそのものが過去の存在としてとらえられているのだから効果がない。実際、驚くべきことに、社会人類学の研究室には、ここで教えていたフレイザーの直筆の手稿ノートが数冊、読解も刊行もされないままに残されていた。タイラーやハッドンなども含めた英国の人類学史を研究する人たちもごくわずかにいたが、フィールドワークのために世界中に散っていく主流派の勢いとは比較しようもなかった。

そんな環境の中で、すでに引退されていた東洋学教授のカーマン・ブラッカー氏が南方熊楠に関心を持ち、筆者の研究に関しても評価していただいたことはたいへんに心強かった。またケンブリッジから小一時間ほど列車に乗ってロンドン中心部の大英博物館に行けば、そこには熊楠が研鑽を積んだ円形ドームがまだ利用者に開放されていて、熊楠の時代と同じように書籍を読むことができた。そのようにして、一九九〇年代の半ば頃には、最先端の学問からはかけ離れた気分で、「ロンドン抜書」などに関連する文献を漁っていたのである。

しかし帰国後、一九九七年から駿河台大学、そして二〇〇一年からは龍谷大学で勤務しながら、ふたたび南方熊楠旧邸を中心として研究を続けていくうちに、徐々に国際的な研究環境が変わっていくのを感じることができた。本書でも紹介したように、一九九〇年代の資料調査の開始以降、熊楠の実証的な研究は飛躍的に進んだ。これと並行して、英語圏やドイツ語圏で、熊楠に関する論文もちらほらと目にするようになって行った。中国語圏との関係においても、二〇〇七年には「孫文と南方熊楠」というシンポジウムを神戸で開催し、中国語と日本語で報告書が刊行された。

その後、二〇〇九年度に筆者は、一年間の研究休暇を得て、ふたたび英国に戻って、ロンドン大学東洋アフリカ研究所の客員研究員となる機会をいただいた。大英図書館はすでに博物館から分離してセント・パンクラス駅横の近代的な建物に移管され、ロンドンの街は十五年前の前の滞在の頃とはちがって、明るく多文化的な活気に満ちていた。そしてこの一年間の滞在を通して、欧米における知的潮流の変化を如実に感じさせられることになったのである。

この時の滞在では、ロンドン大学や国際交流基金で多くの英国人に対して講演を行う機会を得た。そこで熊楠の話をしたところ、聞き手の反応には、以前とはまったく異なる熱気を感じた。筆者の英語での講演の能力は、聴衆を魅了するというような高いレベルのものではないのだが、それでも熊楠の学問の現代性について話すと、たくさんの人が身を乗り出すようにして聞いてくれた。そして、講演後にはきまってさまざまな質問を受けることとなった。

そうした際に感じたのは、海外で熊楠を語ることの何とも言えない開放感であった。日本国内での評価としては、依然として熊楠はやはり本流から外れた変わった学者、という印象がどうしてもぬぐえないところがある。しかし、海外で話していると、むしろ近代から現代にかけての日本の他の知識人一般の方が偏っていて、熊楠は世界基準で学問をしていたきわめて真つ当な人物としか思えなくなってくる。

酒を飲んで暴れたとか、暑いから裸で暮らしていたとか、気に入らないと反吐を吐いたとか、そんな極端な話をした時でさえ、「へえ、人間的な人ですね。これだけの学問を作り上げた人物がそんな人間的な人だったのはとても興味深い。もっと教えて下さい」という感じである。オリジナリティを持って個人として自己主張することこそが重要で、学者間で徒党を組むような日本流のやり方が通用しない欧米の感覚からすると、熊楠は彼らがストレートに理解したり共感したりできる数少ない日本人思想家なのかもしれない、と考えるとようやく合点が行った。

それでも最初はそんな反応に半信半疑で、そうは言っても熊楠にはこんな限界があつて、などと弁解のように話したりしたのだが、だんだん彼らの評価こそが正しいのではないかと思うようになってきた。十九世紀末の西洋中心の一方的な学問秩序に対して真つ向から果敢にチャレンジしたこと。東アジアの博物学や密教思想と近代科学の融合に基づく新たな世界観を模索していたこと。生態系の保全に対して先駆的な視野を持っていたがゆえに孤立せざるを得なかったこと。そうした熊楠の知的探究の持つ普遍性は、たしかに現在の世界のどこに持って行っても通用するような、揺るぎない価値を有している。そのことを日本の国内外の人に伝えることができるという確信を、二十数年の時間的経過を経て、ようやく筆者も持つことができるようになったのである。

その一方で、そうした大きな文脈の中で熊楠の学問を確立していくためには、ごまかしは禁物である。熊楠は、英

文においても日本語においても、参考文献の探索とその正確な記述に心血を注いだ学者である。抜き書きや書き込み、腹稿などのノートを分析すると、熊楠が同時代の学問や古今東西の文献記録に対して、いかに真摯に向かい合っていたかがよくわかる。だからこそ、彼の思想的な飛躍は確固とした基盤を持ったものとして、現在および未来の研究者が本気で取り組まざるを得ないものとなったのである。

そうした熊楠の学問に向き合うことは、研究者にとっても、どれだけきちんとした実証的な方法論を一貫して保っているかを問われる作業である。一時的な読者の関心に合わせて熊楠を神話化したり、表層的なイメージを駆使して華麗に語ったりしても、そのような言説は長い目で見れば砂上の楼閣として消え去っていくことになる。数十年、数百年という時間を見据えながら熊楠の学問の全体像を明かにしていくという仕事は、結局のところ、彼自身がおこなっていたような正攻法の学問的手続きに則って、基礎資料に基づく分析を一つずつ、ていねいに確定していく地道なやり方によってしか、なし得ることができない。

その意味において、紆余曲折を経た後に、今回の著作の元となる稿を東京大学大学院総合文化研究科の博士論文として提出できたことは、筆者にとつてたいへん幸運であった。一般的に二十代から三十代にかけて取得する課程博士の学位を、研究生活の出発点と位置づけることは、すでに社会科学だけでなく人文学においても主流となりつつある。そのような中で、二十数年に及ぶ資料調査の成果に基づいた論文を、何人もの方の手を煩わせて審査してもらおうという実に遠大な過程を経ることができたのは、なかなか得がたい僥倖と言うべきであろう。修士論文から博士論文にかけて、筆者はまことに贅沢な時間の使い方をさせていただいたと考えている。

本書の上梓にあたって、御礼を申し上げたい方は数多い。一九九二年の邸内資料調査の開始から二〇〇六年の顕彰館の設立まで、南方熊楠資料研究会のメンバーの方々と一緒に作業させていただいたことは、筆者の研究人生の基盤となった。共同作業にあたっては、筆者自身の稚拙さや怠慢から多大なご迷惑をかけたことも一度ならずある。本書を刊行することが、少しでも、こうした長年のご厚誼に対するご恩返しになっていればさいわいである。また、この

間、田辺の南方熊楠顕彰館、白浜の南方熊楠記念館などの関連の方々にもさまざまな恩恵を受けた。二〇一五年に資料研究会を受け継ぐかたちで設立された南方熊楠研究会の仲間のみなさまとともに、さいわいにして熊楠の地元に残された貴重な資料を活用しながら、今後も研究を進めてゆきたいと考えている。

博士論文の提出にあたっては、主査の菅原克也氏にていねいなご指導を受けた。また、論文審査の際には、徳盛誠、岩本通弥、佐藤健二、稲賀繁美の各氏に有益なご助言を賜った。審査と前後して、個人的に草稿を読んでご意見をいただいた鈴木滋、椋島良介、田村義也、志村真幸、小田龍哉の各氏にも御礼申し上げたい。

それから、やや場違いかもしれないが、本書の校正の過程において妻の松居郁子が活躍してくれたことを記録しておきたい。本書の一つの特徴は、多様な出典や一次資料を用いた詳細な情報提供にあり、校正の専門的な知識を持つ妻の協力を得たことよって、記述の精度を格段に高めることができたと考えている。

本書の編集をご担当いただいた慶應義塾大学出版会の上村和馬氏から最初に執筆の依頼を受けたのは、二〇一二年秋のことである。それから四年の歳月にわたって、出版社としての都合よりも、長く読み継がれる本を生み出すことの方を優先した上村氏の言葉はたいへんありがたいものであり、結果的に本書が今の自分に書きうる最大の規模・内容のものとなることへと導いていただいた。

こうして誕生した本書が、その準備期間に見合うような長い年月にわたって、将来のよき読者を得続けることを祈りたいと思う。

二〇一六年八月

松居竜五